

第４回：内陸平原地域

沿岸山脈の内陸側や北部丘陵地帯の南麓には、扇状地性や盆地性の平坦地が連なって分布している。冬期には比較的降水に恵まれ、山岳地帯からは河川や湧水が流出し、さらに夏期には高温乾燥条件に恵まれるため、本地域は古くから重要な穀倉地帯として発展してきた。実際、冬期に本地域を訪れると、見渡す限りの麦の海原といった景観が広がり、肥沃な三日月地帯と呼ぶにふさわしい地域である。

本地域における主な栽培作物は大麦、小麦、綿花、甜菜等であるが、ひよこ豆、レンズ豆等のマメ科作物やトウモロコシ等も広く栽培されている。大麦は天水で栽培可能であるが、綿花、トウモロコシ等の夏作物は灌漑無しには栽培できない。本地域における農業の大きな特徴は、耕地で栽培された作物の収穫残渣が家畜に対する重要な飼料資源となっていることである。春先から初夏にかけて牧野における自然植生を飼料として利用していた家畜達は、小麦の収穫とともに耕地に移動してくる。小麦の収穫残渣を利用した後、各種夏作物の収穫跡地を移動し続ける。綿花の収穫残渣を利用し終わると、冬の間は給餌が一般的となり、牧野における春先の自然植生の生育を待つことになる。



土地利用に関連して、今後の持続的農業開発の推進には、これまでのような小麦・綿花の連作による収奪農業からの方向転換が重要な鍵を握っている。基本的には輪作体系の見直しが必要と思われるが、小麦、綿花といった主要作物については、政府により生産計画が立てられている。この生産計画が、時として適正な輪作体系の実施に影響を与えている。今後、効率的且つ持続的土地利用を目指した関連各局による調整が必要となろう。土にやさしい農業を展開するために、輪作体系の中にマメ科作物を積極的に導入したいところであるが、収穫の機械化等に問題があり、これまでのところ思うようには進んでいない。今後、作物栽培と家畜生産を合理的に組み合わせた有機農法の展開が特に重要となろう。そのためには、堆厩肥や緑肥あるいはリサイクル堆肥の利用に関する研究も、さらに促進されるべきである。次に、水利用に関連して、灌漑農地における塩害が極めて大きな問題となっている。塩類集積を引き起こす主な要因は水管理の不適正にあり、特に給水中の漏水や排水不良が至る所で問題となっている。一度塩類が土壌表面に集積してしまうと、その改良には莫大な投資が必要となる。従って、当面重要なことは塩類集積を引き起こさないような水管理システムの確立にあると思われる。そのためには、作付体系に応じた給水システムの策定及び運用、農民グループによる用排水路の維持管理等圃場レベルでの水管理の徹底が必要になってくる。また、塩類土壌の有効利用に関しては耐塩性作物の導入や養魚といった新しい試みも興味深い。